



TOPICS

“Empower!”を合言葉に、教育力と研究力で 地域社会のSDGsの担い手となる

地域から世界へ。
つなぐ力で持続可能な
幸福社会を目指す

「地域創生」「次世代形成」「多文化共生」という大学の3つの使命とSDGsをつなぐ取り組みで注目を集めているのが山形大学だ。

環境問題や人口減少、国際競争の激化などの課題に取り組み、さらに人類の将来にかかわる課題の解決に向けて、学内および地域における学生活動、研究プロジェクトをSDGs視点で活性化していると言う。

山形大学の歴史は、明治11年（1878年）の山形県師範学校の開校に始まる。昭和24年（1949年）に新制国立大学となつてからは10万人の卒業生を社会に送り出しながら、地域貢献・地域連携でも数多くの実績を積んできた。そして2022年3月、3つの使命を果たすにあたって地域社会とともに歩む大学の真のあり方を全関係者に浸透させるため、「山形大学将来ビジョン」を策定した。社会のさまざまなパートナーと共有する目標

を立て、必要な資源を集め、力を合わせて実現することをすべての活動で実践していく。キーワードは「つなぐから」。社会に存在するさまざまな壁を越えて、人と人、異なる知と知をつなぐことで新たな価値を生み出す。これを将来ビジョンの基本宣言では「共有・共創・共生」と呼んでいる。また、4つのキャンパスを「コモンズ」＝地域や世界の多様な人々を時空を超えてつなぐ場と定義している。

将来ビジョンのゴールは「持続可能な幸福社会の実現」である。幸福という一見、抽象的に思えるが、OECDのBetter Life Indexのように健康、環境、安全、主観的幸福感といった社会指標を設定し、大学の教育や研究によつてそれらの指標の向上や解明に取り組むことで、幸福の実現を実践的に推進していく考えだ。

SDGsに貢献する地域の取り組みを積極的にEmpower! 山形大学は地域に立脚

山形大学は地域に立脚



する国立大学として、長年にわたり社会の発展と持続可能な社会のあり方を探究している。近年では、これまでの取り組みをSDGsの枠組みを最大限に活用して大きく前進させようとしている。そのコンセプトが「YU empowering with SDGs（山形大学がSDGsで力づける）」である。学内ではSDGsの枠組みを活用した授業や学生活動を展開し、学外に対しては持続可能な発展を目指す地域の各種取り組みを積極的に支援することを目指している。

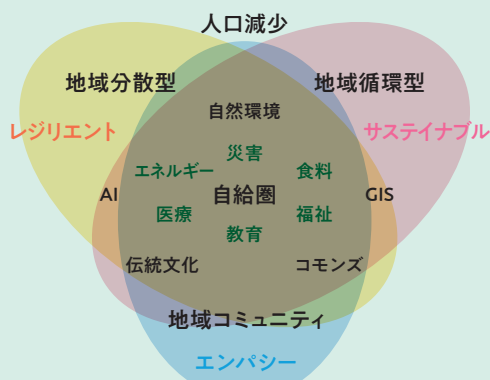
全学の取り組みを一体化し、推進するタスクフォース

2020年4月、玉手英利学長は学長に就任して間もなく、今後の重点事項として「社会の持続的発展に貢献する」ことを表明した。これを受け、翌5月に林田光祐副学長をリーダーに「山形大学SDGs（YU・SDGs）タスクフォース」が設置された。

タスクフォースの役割は学内および地域におけるSDGsの取り組み支援と普及支援だが、特に地域においてはSDGs実践の主導的役割を果たすことを目指している。また、SDGsを戦略的に捉え、支援を得ることが難しい事業や人文・社会科学の研究を強化することもポイントである。

これまでにタスクフォースが行った取り組みは「やまがたSDGs推進ネットワーク」のプラットフォーム開設と学外との連携構築（16の企業、5つの自治体、2つの教育機関、その他9つ

山形大学がコミットしてつくる地域社会のゴール やまがたモデル



地域社会のSDGs、やまがたモデル

タスクフォースは今後の構想についても公表している。SDGsへの対応指針として、レジリエント（柔軟な、弾力ある）、サス

の機関と連携）、ポータルサイト「YU-SDGs EmpowerStation」の開設、SDGsをテーマにした学生シンポジウムや基盤共通教育科目の開設、学内外から参加できるトークセッション「YU・SDGsカフェ」の開催など、コロナ禍でも積極的な活動を続けている。

ティナブル（持続可能な）、エンパシー（共感、人を思いやる）の3つをキーワードに、山形らしいSDGs、つまり地域社会のゴールとして上図のようなやまがたモデルをイメージしている。SDGsを通して人類社会のあり方を考えながら、地域で安全に暮らせる仕組みをつくる。それが、山形大学が目指すべきローカルゴールズであるとしている。

学生シンポジウムを開催してオンラインで約40名の山形大学生が、持続可能な社会のあり方や自らの行動や考え方などを話し合いました。参加者からは、「まだまだ勉強中だが自分もSDGsを広める側で関わってきたい」という感想をいただき、SDGsに興味がある学生が周りにたくさんいることに気づき、うれしい気持ちになりました。（YU・SDGsタスクフォースメンバー 工学部4年 河田亜依）



YU-SDGs Award 2021大賞 「がんゲノム検査の実現と展開～山形オリジナルのプロジェクトを含めて～」

YU-SDGs AwardはSDGsの達成に貢献する優れた教育・研究・学生活動・大学運営等を行っている個人・団体を表彰し、今後の活動を支援することを目的としている。

がんゲノム検査を山形県独自の内容に改善、発展、展開させていくプロジェクト。山形大学医学部附属病院がんゲノム医療管理室コアメンバーが行っている。一般的に、ゲノム検査は国外や京都大学等のデータベースを使用し、そこから得られた結果を解釈する。しかし、このプロジェクトでは、「山形県民の遺伝子データベース」を独自に参照し、山形特有の遺伝子変化が生じているか、といった観点も含めて解釈を行う。山形県民に特化した結果を返却し、山形県民の健康と福祉につなげることを目指している。ゲノム検査を独自で完遂できる施設は日本に45施設（2022年5月現在）。本院はその一つであり、「がんゲノム医療拠点病院」として認定されている。ゲノム検査は、治療法が無い患者にゲノムの観点から検査を行い、治療薬を探すというもの。しかし、まだまだ課題は多いと言われる。そうした状況の中、地域の患者に特化することで、より精度の高い結果を目指す取り組みであるとして、SDG3（健康と福祉）、SDG9（産業と技術革新）ほかの観点から高く評価された。

